

鬼巫女マキ

上田ながの  
表紙イラストひななくま

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『鬼巫女さま』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



鬼巫女バニマ

上田ながの  
表紙／ひなくま

## 登場人物紹介

### Characters

---

いせのよつば

#### 伊勢野四葉

勝ち気な性格の女性陰陽師。半人前であるため仲間たちから軽んじられており、いつか見返してやりたいと思っている。まだ男は知らず、性的には未熟な面もある。

おにみこ

#### 鬼巫女さま

見た目は少女だが、実は数千年生きている鬼。都に出没し、男根から精気を吸い取り続けている。外見に似合わず、淫乱な性格をしている。

静かな夜。

満月が天に輝き、地上の木々を照らす夜。

リーンリーンという虫の鳴き声だけが、響いているような夜。

「……ここか」

都外れの神社の境内に、一人の人影が見えた。

白い狩衣に黒い烏帽子を被った者。腰まで伸びた黒髪が、夜風にサラサラ舞っている。歳は二十歳前後。真っ直ぐ伸びる鼻筋に、凜とした輝きを秘める瞳が印象的な——女。身体の線が出難い服装だというのに、胸元は大きく膨らんでいた。

名は伊勢野四葉。現在陰陽寮に所属する唯一の女陰陽師である。

都に出没する異形の者を退治するものとして、鬼が潜むこの神社へとやって来た。

最近都に住む若い男ばかりを襲い、犯し、精気を奪うという事件を繰り返している鬼。未だ死者は出ていないものの、何時最悪な事態に陥ってもおかしくなかった。

（絶対に私が退治してやる）

四葉は決意を胸に秘め、力強く拳を握り締める。人に悪さを働く相手を、許すわけにはいかない。

それに、仲間の陰陽師達から軽んじられている自分。陰陽師としての實力には自信があるのに、認められないのが悔しい。きっと女であるという事が、理由なのだろう。その評

価を逆転させる為にも、自分一人で事件を解決したい。誰かに負けたままにいる事など、耐えられない。

「たかが鬼一匹。私の力を見せてやる！」

グッと拳を握り締め、決意の言葉を口にする。

「ほう、たかが鬼一匹ねえ。ふふ、いつてくれるではないか。たかが人間一匹が」

その時、辺り一面に響き渡る声が聞こえた。

「だ、誰!? どこから!？」

驚きつつ周囲に視線を走らせながら、狩衣の袖から素早く呪符を取り出す。慌てたせいか、符は折れ曲がったりしてしまっている。破れているものまであった。

「ちよ、ああ！」

思わず悲鳴を上げてしまう。徹夜して作った呪符。眠い目を擦りつつ、白い紙の上に呪文を書いた想い出が浮かび上がってくる。瞳が僅かに潤む。何か色々な想い出が思い浮かんできて悲しい。頭を抱えて座り込みたい気分だ。

（でも、こんな事で、こんな事で私は負けられない。私は都を騒がす鬼を退治しなければいけないんだ！）

流れ落ちそうになる涙を堪え、強い決意を胸に秘める。

周囲に充満してくる強い妖気に耐えながら、女陰陽師は呪符を空中に向かって投げた。

「どこで私を見ているのかは知らないけど、炙り出してやるわよ！」

ヒラヒラ宙を舞う符。同時に腕で印を組む。

「フンッ！」

自身の肉体から霊圧を解き放った。

瞬間、符が鋭い刃に変化し――。

ヒュバババッ！

風切り音を立てながら、妖気源へと撃ち放たれた。

飛んでいった五本呪刃が地面に突き刺さる。同時に刺さった刃が、光を放ち五芒星を形作った。

「そこか！ 捕らえた！ ムンッ！」

組んでいた印に力を込める。

パアアッ！

五芒星を作り上げる光が、より激しさを増す。

「これは!? チイッ！」

光の中心の、何もない空間から聞こえる舌打ち。

グニヤリと景色が歪み、一つの影が姿を現した。

「……ぐ、わしの術が……」

現れたのは巨大な鬼。筋肉質の真っ赤な肉体に、二本の角が額から伸び、口からは鋭い牙も覗く。こちらの二倍、いや、三倍はある身長。肉体からは多量の妖気が噴出してきている。凄まじい圧力となつて、肉体を襲つてきた。

(でも、もう私の勝ちよ！)

いかに相手の力が強くとも、既に拘束術によつて敵を捕らえている。

「このままあんたを封印してあげる！」

新たな呪符を取り出し、自分の霊力総てを込めた。

「おのれ！ おのれえ！」

危機を感じたのか、鬼は激しく暴れる。四葉の作り出した結界から何とか逃れようと、唸り声を上げ、腕を振り回す。地面に描き出された五芒星から、天に向かって作り上げられた光の壁が打ち出される腕の一撃を受け、ミシミシと音を立てた。

壁に受ける衝撃が、僅かではあるがこちらの肉体にも伝わってくる。女陰陽師は眉間に皺を寄せつつ、ぼそぼそと呪言を唱えた。

「これで——終わりよ！」

シユバツ！

全霊力を込めた呪符を投げる。まるで槍のような勢いで鬼へと向かい、額にピタリと張りついた。

「封！」

新たな印を組み、発する一言。

シユバアアツ！

額の呪符が強大な光を放ち、鬼の肉体を包み込む。

「ゴオオオッ！」

上がる唸り声。暴れまわる巨軀。

そんな中で徐々に薄まっていく光。それに合わせるように、鬼の巨体も消えていった。

陰陽道にある封印術。たとえどれ程強大な力を持った相手であっても、一度捕らえれば逃す事はない。

（やった！）

光が消える。鬼の姿も消えていた。額に張りついていた呪符だけが、ひらひらと地面に向かって落ちていく。凝縮された鬼の妖気総てが、その一枚の紙に封じられていた。

地面に落ちた符。四葉はそれをゆつたりとした動作で拾い上げる。陰陽道教本を読みながら、必死に作り上げた呪符。

（私が封じた。皆が苦戦した鬼を私が……）

感動がじわりと胸に込み上げてきた。

「ふ、ふふふ……ふははは、あはははははっ」

笑いが込み上げる。境内に響き渡る笑い声。この手柄さえあれば、きっと他の仲間達も自分の事を認めざるを得ないだろう。やっぱり自分は優秀な陰陽師だった。

「なかなかやるのう。少し驚いたぞ」

再び辺りに声が響く。

「またあ？」

先程とまったく同じ展開。慌てて呪符を取り出そうとした。

ズオオッ！

その動きよりも早く足元に巨大な影が広がる。

「ひっ!？」

猛烈に嫌な予感がし、慌てて自分中心に円形に広がる影から出ようとした。だが、影の中から数本の植物の蔦のような触手が出現し、脱出しようとする四葉の両手足に絡みつく。強烈な締めつけは、腕や足に痛みを走らせる。

「くっ！ やっ！」

触手から脱しようともがく。だが、触手の力は人のソレを遥かに超えている。女陰陽師の細い身体は、地面に引き倒されてしまった。

地面に仰向け、両手足を広げた大の字の姿勢で、拘束されてしまう。

「ぐ、くそっ！ どうしてこんな事に？」

動けない。もがきながら、置かれた状況に思考を巡らす。

「なんで……か。それは御主の見込みが甘いからじゃろうな」

今度は近くから声が聞こえた。

「誰っ!？」

聞こえてきた方へ、視線と言葉を向ける。

「誰か……人間如きに名乗る名はないのう。くく、しかしそうじゃのう……わしの事は鬼巫女さまとでも呼ぶがよいぞ」

どこか可愛らしい声。

月明かりの中、倒れ伏す四葉を見下すように立つ影が見えた。

「……嘘」

少女だった。

身長が四葉の肩くらいまでしかない小柄少女。白い小袖に赤い女袴という巫女装束に身を包んでいる。どこか丸みを帯びた体つきは、成長過程である事を思い起こさせた。

目は細く吊り上がっている。瞳の色は金色。夜の闇の中で妖しく輝く。肩の辺りまで伸びる髪も、白銀色であり、人外の輝きを放っていた。

(違う……鬼のいう事なんか間違ってる……)

それは分かっている。分かっている筈なのに、肉茎を踏みつけてくる冷たい足裏の感覚を忘れる事ができない。もつとこれが欲しいと思ってしまう。

「十分頑張ったじゃろ？ 誰も御主を責めたりしないさ」

陰茎を圧迫し、足指で扱き続けながら、優しい言葉が投げかけてくる。

(わ、私は……)

真っ赤に染まる肉棒。既に限界を超えているのに、射精する事は許されない。意識が押し潰されていく。

(……頑張った。私、頑張ったよね?)

射精したい。塞き止められているものを吐き出したい。心が一つに集約する。

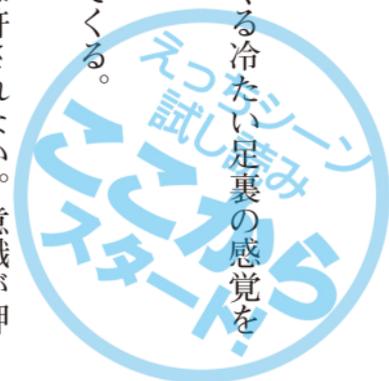
「す……」

小さく口が開く。

「……吸って……わ、私の精気を……吸って……吸ってください……」

四葉の心が折れた瞬間だった。

「そうか……くく、分かった。よくいえたのう。よしよし、では吸ってやろうではないか」  
触手に縛られたままの肉棒を見つめながら鬼巫女さまは笑うと、自らの手で赤袴を捲りあげる。今にも折れてしまいそうなほど細く、白い足が露になった。透き通るほど真っ白



な肌。少女のような肉体にあった、小さな秘部まで晒される。

毛の生えていない陰部。ただ、花弁は既に濡れそぼち、小陰唇は怪しく花開いていた。蠢く肉壁から流れ落ちる愛液が、少女の太股を垂れ流れていく。

「あ、ああ……早く！　早くしてえ！」

怪しい少女の蜜壺に、四葉の視線は奪われた。捲られた袴から肉棒を勃立させ、太股、着物を身に着けたままの上半身を触手で絡め取られたままの状態で、苦しみからの解放を求める声を上げる。本能のままの叫びだった。

「ふふ、そうあまり急ぐ……ん、あ、ああ……は、挿入<sup>はい</sup>つて、わしの膣<sup>なか</sup>中に挿入<sup>はい</sup>つて来るぞ。あ、ああ……んんん……」

鬼巫女さまは肉棒の上に立つと、そのまましゃがみ込んで来る。足を蟹股に開き、ゆっくり腰が落ちてきた。恥肉に肉先が触れると、肉壁が花開く。二人の女の待ちに待ったものが、遂に触れあった。

ずぶ、ずぶじゅ、ぶじゅるう……。

小さな蜜壺を女陰陽師の肉棒が押し開いていく。ギチギチと肉壁が陰茎から精を搾り出そうと、圧力をかけてきた。体表とは違い、膣中は温かい。

「んぐおっ！　おふうっ！　締まる！　うあっうああっ！　私の、私のだん、男根を締めつけてるう！　いぎっ！　ぎひいっ！　だ、射精<sup>だ</sup>したひっ！　射精<sup>だ</sup>したひいっ！」

痛々しいまでに陰茎は膨張している。これまで与えられてきた刺激により、今にも爆発してしまいそうな状況だった。

褌が肉茎を擦り、カリ首に引つかかる。その度に肉棒だけでなく、全身が痙攣した。既に四葉の蜜壺からも愛液が分泌され、地面に水溜まりができていく。膣奥にまで男根は侵入していく。肉の悦楽と無理矢理遮断させられている射精の苦しみ。二つの感覚が脳内で混ざり、溶けあう。

「んああつ！ 奥まで、奥まで挿入っておるぞ……あつああつ！ だ、射精させてやる！ わ、わしっの、な、膣中に、射精させてやるぞお！」

肉根に巻きつき、射精を塞ぎ止めていた触手が離れていった。

瞬間——。

「おうっ！ おああつ！ 開くっ！ わひっ……私の、私のさつきぽが、さきつぽが開くうっ！ ひぐっ！ ほうっほうっ！ 射精る！ 射精ちやうっ！ おあつ、はおうっ！」

遮断され続けていたものが開放された。

「あつ！ ひいっ！ わ、わしの膣中で大き、大きくなるうっ！」

更に一回りほど肉棒が大きさを増す。止められていた熱汁が、怒涛の勢いで肉先へと駆け上がり——。

「イグッ！ ほああつ！ あつー！ あつあつー！ 射精る！ 止まらないっ！ とまら

なひいっ！ であるっ！ であるうっ！ おひいっ！」

どびゅっ！ どっびゅどっびゅどっびゅ……どびゅうっ！ どびゆるううううっ！

大量の白濁液が小さな蜜壺の中に撃ち放たれた。膣が粘着液で満たされる。何度も痙攣を繰り返しながら、吐き出され続ける精液が、子宮にまで流れ込んでいった。

待ち続けてきた絶頂により、四葉の思考は真っ白に染まる。弓反りになる身体。硬い地面に細い指、薄ピンク色の爪が突き立った。

「はひっ！ 入ってくる！ 熱い、熱いものが入ってくるう！ ああ、精気が、精気がわしを、うあっ！ わひをおっ！」

白濁液は子宮にさえも収まりきらない。

ぷしゅっ！ ぷしゅっ！ ぴゅっ、ぴゅうっ！

膣口から熱液が噴き出た。

液と共に鬼巫女さまへと精気が流れ込んでいってしまふ。多量の気を一気に受け取り、鬼少女の意識も刈り取られているように見えた。

びゆるっ、びゆるっ！

結合部から漏れ続ける熱汁が、肉棒を伝って女陰陽師の蜜壺まで流れていく。粘着液が愛液で濡れる膣口に到達した。自分自身の精液が、自分の陰部へと流れ込む。

「ひぎっ！ ああ、やあっ！ なに、なにい!!」

興奮しきつた陰部も、男を求めていた。辺り一帯に漂う精臭が、四葉の女まで発情させる。「はあ、はあ……あつあつ……お、おぬっしも、欲しいのかあ？ うくう……なら、ならば……くれてやる……御主にも、わ、わしが……快樂をくれって、やる……」

みちつ、みちみちみちいっ！

「うあつ！ ふぐあああつ！ んんんん！」

肉の軋む音が響き渡ると共に、小さな鬼少女の肛門から、赤黒い肉の塊が伸びる。龟头状に肉先が膨らみ、粘着液を分泌させる姿は牡の性器そのものだった。

「ゆくぞ……御主の膣中に挿入れるぞお」

ちゅぐつ！

尻穴から伸びる肉棒は、ちょうど膣口に触れるような形で曲がっている。未だ純潔を守りながらも、陵辱されたかのように開いている肉孔に肉先を当てると、そのまま腰を突き入れてきた。

「んあつ！ ふあああああつ！ は、はひっ！ は、挿入はいつてくるう！ 私が、私が挿入はいれるのに、挿入れられてるうっ！」

陵辱棒の侵入を分泌された愛液が助け、女陰陽師の処女膜に触れた。

「わしが、わしがおぬ……はっはっはっ……御主を女にしてやる。この、わしがっ！ わしがあつ！」

「んぎっ！ ひぎっ！ ひぎいっ！」

何の躊躇もなく、鬼巫女さまは腰を突き入れてくる。

ぶぢっ、ぶぢ、ぶぢぢぢぢぢぢっ——ぶぢいっ！

「あがつ！ ひいっ！ ひぎいいいっ！」

あつさりと四葉の純潔は破られた。激しい痛みが全身に走った。だが、その痛みすらも、今の女陰陽師の肉体は快楽へと変換していく。

「な、何でえ!? きも、ぎもぢいいいっ！ いだいのにいっ！ きもぢいびよおっ！」

口が開き、舌が伸びる。舌先は痙攣し、視界が揺れた。

「おああっ！ わひの、わひのい、陰茎が、陰茎が締めつけられっるう！」

待ちに待った男根に、媚肉は喜びの悲鳴を上げ、牡汁を搾り出そうと圧迫を強めた。

「はあはあ、う、動く！ 動くぞおっ！ んくっ！ ああっ！」

鬼少女は貪欲に更なる快楽を求める。そしてそれは、女陰陽師自身にもいえる事だった。

「ほおあっ！ うご、膣中でうごついてるう！ それにい、まだ、まだ硬い！ わたひの

男根……まだ、まだかたいよおっ！」

射精したばかりだというのに、未だ肉棒は勃起し続けている。それどころか、膣を一突きされる度、更に大きさと硬さを増しているようにすら思えた。

縛られたままの無茶な体勢で、腰をカクカク動かす。愛液と白濁液に塗れた男根が、小

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**